

生徒代表 あいさつ

人類の歴史を振り返ると、かつて多くの命や人々のささやかな幸せが、戦争という暴力によって一瞬にして奪い去られた凄惨な事実が存在します。八十年前の沖縄戦は、その象徴とも言える激しい地上戦であり、二十万人もの尊い人生が強制的に途絶えさせられました。その中には、現在の那覇高校の前身である県立第二中学校の生徒「二中健児」のように、学ぶ未来を奪われ、過酷な戦場へと身を投じざるを得なかった若い世代も含まれていました。

このような歴史を前にしたとき、私たちが今享受している「平穏な日常」が、いかに奇跡的なバランスの上に成り立っているかを再認識せざるを得ません。何気ない毎日を過ごせることは当然の権利ではなく、二中健児をはじめとする過去の重い犠牲と、それを乗り越えようとしてきた人々の歩みの上にあるものです。

忙しい現代社会において、私たちは過去の出来事を遠い昔の出来事として片付けがちになります。しかし、沖縄戦の記憶をたどる慰霊の日などの記念日は、単なる形式ではありません。日常生活の手を止め、かつての過ちや犠牲に深く向き合うための、社会にとって不可欠な機会です。こ

うした記憶を風化させず、社会全体で共有し続ける仕組みを守るこそが、安定した社会を維持する基盤となります。

「いかにして平和を維持するか」という課題に、簡単な答えはありません。だからこそ、一人ひとりが思考を放棄せず、多角的な視点から問いを立て続けることが重要です。歴史の教訓を風化させることなく、一人ひとりが高い意識を持ち続けることそのものが、過ちを繰り返さないための確固たる防波堤となります。

時が経つにつれ、沖縄戦の悲劇を直接知る人々は確実に減少していきます。だからこそ、二中健児の塔に象徴されるような歴史の本質を客観的に学び、事実を正確に次の世代へと受け継いでいく「伝える責任」が、現代を生きる私たちにはあります。これは過去に対する誠実さであると同時に、未来の社会に対する義務でもあります。

戦争を直接経験していない世代だからこそ、先入観を持たずに事実を検証し、見えない痛みを想像する力が求められます。忘れてはならない歴史を言葉に紡ぎ、具体的な行動へと昇華させ、次代へと託していくこと。それこそが、今を生きる人々に共通して課せられた役割です。

沖縄戦で犠牲となったすべての人々、そして二中健児の御霊（みたま）へ、深い哀悼の意を捧げます。先人が望んだ「争いのない社会」という理想の重みを厳粛に受け止め、その本質を未来へつなぐことをここに共有します。

また、痛ましい記憶を語り継ぎ、社会に警鐘を鳴らし続けてこられた遺族の方々をはじめとするすべての方々の努力に、心より敬意を表します。私たちはその真摯な訴えを受け止め、偏りのない広い視野でこれからの社会のあり方を考えていかなければなりません。

過去の教訓をただの知識に留めることなく、安全で安定した社会を維持するために。単に平穏を願うだけでなく、強固な意識を持ってその環境を守り、発展させていくために、私たちは一歩ずつ確実に歩みを進めていく必要があります。歴史を正しく見つめ、未来へ向けて建設的な歩みを続けていくことを、ここに強く願います。

令和八年六月二十三日

生徒代表

那覇高等学校 生徒会長

木場 洋翔